

バンコクにおける鈴木忍と『簡易日泰会話』

齋藤 正雄

1. はじめに

本稿においては1942年、タイのバンコクにおいて作成された『簡易日泰会話』と当時日本外務省から日泰文化研究付属日本語学校（盤谷日本語学校）に派遣され日本語講師をしていた鈴木忍について考えてみたい。

戦後のタイにおける日本語教育は世界的にみても成功例の一つとして評価されているが、その背景には政治、経済、文化等あらゆる分野での日タイ両国の強い結びつきがあげられる。日本語教育の分野では、戦前から既にその実践が行われてきており、その成果が戦後遺憾なく発揮されたとも言える。タイにおける日本語教育の先駆者が鈴木忍であった。当時鈴木は日本語講師としてタイ人学習者に日本語を教える一方で日本語教育教材の開発にもあたった。また、第二次世界大戦中下、南方特別留学生の指導にあたるだけでなく、鈴木自らが留学生を日本へ引率した。鈴木は敗戦後の抑留生活も含めると6年の歳月をタイで過ごした。本稿では、バンコクにおける鈴木忍とその時代、そして、実質的には鈴木個人の著書と考えられる『簡易日泰会話』を通じて当時の日本語教育を考えてみたい。

2. 鈴木忍とその時代

2.1 鈴木忍とバンコク在任時代

鈴木忍（1914～79）の経歴を眺めると次のようになる⁽¹⁾。

1936年9月：国際学友会に就職（同年長崎高等商業学校海外貿易科を卒業）

1941年7月：在バンコク日本語学校へ赴任（外務省文化事業部からの派遣）

1947年7月：敗戦により帰国

1951年6月：国際学友会に復職（52年1月に国際学友会教務部長兼日本語教室主任）

1962年：「外国人のための日本語教育学会」（日本語教育学会の前身）の創立に尽力

1960年代：国際学友会日本語学校長として活躍

1970年代：東京外国語大学外国語学部付属日本語学校教授兼教務主事として活躍

鈴木は長崎高等商業学校海外貿易科を卒業後、事務職として国際学友会に採用された。本来教師ではなかったが、当時、国際学友会ではその宿泊施設に泊まっていた学生に対する日本語教育が始まっており、鈴木も日本語の教授に加わっていた。鈴木は希望して日本語教員の一人となったが、国際学友会の教材作りは岡本千万太郎、松村明ら東京帝国大学国語学を修めた教員が担当し、当時専門家ではなかった鈴木忍は教材作りに加わることはできなかった。

鈴木忍が本格的に日本語教師としての仕事を任されたのがタイのバンコク日本語学校講師の職である。外務省文化事業部から派遣され 1941 年 7 月に赴任した。赴任後、鈴木は教務主任として、教材作りや授業に追われる日々であった。鈴木の本バンコク在任期間はちょうど第二次世界大戦と時を同じくしており、鈴木は南方特別留学生の赴日研修にも当たった。そして、1944 年にはタイから日本へ向かう南方特別留学生を自ら引率帰国している。一時帰国し挙式をあげた鈴木は夫婦で再度バンコクに戻り、1945 年 8 月バンコクで終戦を迎えた。終戦によりバンコクでの仕事は終止符が打たれ、他の邦人とともに収容所での生活を送り、1947 年 7 月に帰国した。鈴木忍がタイで日本語教育に携わったのは 1941 年 7 月から 1945 年 8 月までの 4 年間であった。

国際学友会に復職するのは、戦後の日本語教育が復活した 1951 年 6 月のことであった。鈴木は学友会に復帰後、戦後の日本語教育界に多大な功績をしたが、鈴木教授法および教材が突然生まれたものではなく、恐らくバンコクでの日本語教育の経験がその根底にあったのではないと思われる⁽²⁾。

2.2 戦前におけるタイ国日本語教育の沿革

タイにおける日本語教育は日本がロシアに勝利した日露戦争のころまで遡ることができる。1903 年にはタイ国より 8 名の学生が日本に留学した。また、1905 年から 1913 年にかけてタイから海軍の留学生が日本にきていた。

1930 年代に入ると、タイにおいては 1932 年の人民党によるクーデター、日本においては満州事変、国際連盟脱退（1933 年）があり、軍事的には日本とタイは互いに支援、協力を必要とする関係になっていた。そして、1937 年になると、タイ政府はタイの軍人を日本へ政府官費派遣するようになった。こうした背景のもとに『日暹會話便覧』（泉虎一・昭和 12 年）のような会話教材が生まれたのである⁽³⁾。一方、タイの本バンコクではタイの陸軍士官学校やバンコクのボピットピムク校（現ラチャモンコン・ラタナコーシン科学技術大学ボピットピムク・チャクラワット校）で組織的な日本語教育が行われていた⁽⁴⁾。

1930 年代に入ると「戦争」と「日本語教育」は意外な形で結びついていく。日本は国際連盟脱退により世界から孤立してしまったが、状況の打開を図るため 1935 年には外務省に文化事業部ができた。この管轄下に国際学友会が生まれ、1936 年に国際学友会館が開館した。翌 1937 年には柳条湖事変が起こり日中全面戦争に発展して行く中で「文化外交」「国際文化事業の一環としての日本語教育」の重要性が認識されるようになった。具体的には、相手国で日本語教育を盛んにし、日本留学を希望する学習には日本留学の機会を提供し、日本で教育を受けさせる。帰国後は就職を斡旋したり、留学生会を組織させたりする。多数の親日家を養成し、最終的には日本の主張を容易にするといったものであった。

1936 年、日本は「国策の基準」を定めたが、ここには「大東亜共栄圏」と並んで南方進出が含まれていた。こうして、官民あげて「南方」への関心が高まり、多くの企業がタイへ進出してき

た。この1936年は鈴木忍が長崎高等商業学校海外貿易科を卒業し、国際学友会に就職した年である。

タイでの日本語教育事業は、日本の外務省が中心になり、松宮弥平の主催する「日語文化学校」や松宮弥平の息子にあたる松宮一也がバンコクでの日本語学校設立の準備作業に当たった。この準備作業には日語文化学校の教師であった星田晋吾と高宮太郎が加わり、松宮が帰国後、二人はそのままバンコクに残り、12月には日泰文化研究所・付属日本語学校が開校された。

日本外務省は前述のように国内においては「国際学友会」のような学生を支援する組織を作った。海外における日本語普及のための日本語学校と国内の「国際学友会」と、あたかも車の両輪のように相互に補完しあう関係になっていたわけであり、1930年代には既にタイにおいて日本側の指導による日本語教育が組織的に行われていたのである。

バンコクの日本語学校のスタッフは星田・高宮の後に1940年から平等通照・三木栄に変わった。そして、その1年後の1941年7月、鈴木忍がバンコクにやって来た。鈴木の出任はバンコク日本語学校設立の2年半後であった。鈴木の出任によって日本語学校のカリキュラムも変化した。当初バンコクで勉強した学生は、日本へ行って松宮の主催する日本文化学校で継続して勉強するカリキュラムであったが、1941年以降は国際学友会でも継続して勉強できるようにそのカリキュラムが変化して行った。これは恐らく、日本外務省、東京における国際学友会、さらにバンコクにおける学友会出身の鈴木の影響が大きかったのであろう。

2.3 バンコクにおける日本語教育教材

1941年7月在バンコク日本語学校へ赴任し、そこでどんな教材を作成し、どのような教科書を使ってどのような授業を行っていたのか興味深いものがあるが、今となつてはその詳細は分からない。当時の資料によれば、日本語教育振興会『ハナシコトバ』、国際学友会の『日本語教科書 巻一』、『国定教科書巻六』『国定教科書巻七』が使われており、またこの他に鈴木忍自身が編纂した『日本語の基礎』という教材が使われていたようである⁽⁵⁾。

『簡易日泰会話』は鈴木がバンコクに赴任した翌1942年6月に完成しており、鈴木個人の著作と考えるなら、1年に満たない時間で作成されたことになる。鈴木はこうした教材の作りながら、タイにおける日本語教授法を模索し、また一方で鈴木自身のタイ語学習さらには対タイ社会認識を深めていったのではないだろうか。

鈴木は敗戦と捕虜収容所生活を経験して1947年に帰国した。帰国後、鈴木は戦後の一時期教職を離れていたが、1951年に国際学友会に復職した。その後『Nihongo no hanashikata』(1958)『よみかた』(1959)『日本語読本1』(1957)『日本語読本2』(1958)『日本語読本3』(1957)『日本語読本4』(1962)という一連の日本語教科書を作成して行ったのである。おそらく戦前の学友会時代の経験、更にはバンコクでの経験がこのような教材の形をとって継承されているのではないだろうか⁽⁶⁾。また、鈴木は東京外国語大学で日本語教材を作成した後、晩年『日本語初歩』という

初級日本語教科書を執筆するが、その教科書はタイの日本語教育では広く使用され、そのタイ語による文法解説書も出版された⁽⁷⁾。鈴木自身は1979年に他界したが、1980年代、さらには1990年代に至るまでもタイの日本語教育にその影響を及ぼしたのである⁽⁸⁾。

3. 『簡易日泰会話』

3.1 『簡易日泰会話』について

『簡易日泰会話』が出版されたのは昭和17年6月（1942年）であり、第2次世界大戦の勃発からちょうど半年の時点であった。1942年はタイに限らず、アジア各地で日本軍の展開とともに日本語教育が組織的に行われていたことをまず念頭におきたい。同書の序本や奥付からは次のようなことが読み取れる。まず、「日泰文化研究所」という日本側の組織があり、日本語教育をはじめ様々な活動を行っていたこと。そして、「軍民間から簡単にして平易な日泰会話書が欲しいという要望がでて、その編纂を弊日泰文化研究所に委託されていたが、今回漸くこの『簡易日泰会話』を上梓する運びになった。」とあるように、日本側のための実用日タイ辞書という性格を持っていた。また、「本書は先に皇軍の泰国進駐に際し、皇軍兵士の為に日泰会話の枝折として数十頁の日常緊要な日泰会話を謄写版印刷で五百部発行し、無料で頒布した」とあり、この本の前にモデルとなる本があったことが分かる。この辞書はタイ人のための日本語学習書というよりも、日本人のためのタイ語学習書という性格が強かったようである⁽⁹⁾。

奥付には昭和17年6月5日の発行であり、定価が付いているので実費で頒布したようである。作者に関しては序文には三木榮と鈴木忍の二人がその作成にあったように記されていたり、編集著作発行者として「日泰文化研究所代表」の平等通照の名前が記されていたりしているが、実際のところは鈴木がその執筆にあたったようである⁽¹⁰⁾。

3.2 体裁

まず、本の大きさとページ数であるが、縦9センチメートル、横12センチメートル、ページ数はちょうど100ページで、携帯に便利のように設計されている。また、その体裁であるが、左右見開きで左側のページに日本語が、右側のページにタイ語が来るように配置されている。

本書が見開き対訳方式であるとう点は注目に値する。現在、我々が海外を旅する場合、こうした対訳本を手を持ち当該箇所を相手に指し示すことで、コミュニケーションを図ろうとすることがある。当時、恐らく日本人とタイ人が何らかの方法でコミュニケーションを取る必要があったので、こうした形式が採用されたのであろうと思われる。日本人と中国人なら「筆談」という方法が取れたのであろうが、日本人とタイ人ではその方法は使えない。そのため、日本人がタイ語に付してあるカタカナを読んで、タイ人が日本語に付してあるタイ文字を発音してそれでお互いに通じるなら、それはそれで十分だったであろう。また、仮に通じない場合でも、この本を媒介になんらかのコミュニケーションが取れるならば、それで所期の目標は達していたのではないだ

ろうか。そのためか、本書の会話は日本人とタイ人の接触場面となる「買い物」と「場所、道を尋ねる」に重点が置かれている。

3.3 本書の概要

1) 構成

目次はないが、前半の語彙と後半の会話で構成されている。会話は「日常会話」「買い物」「バンコクの生活」が中心である。詳細は別添資料を参照いただきたい。

2) 語彙

総語彙数は約 1400 語である。本書の特徴として、バンコク市内の固有名詞が 174 語もある点があげられる。また、戦時を反映して軍関係の言葉が 80 語もある。そして、中には「歩哨」「斥候」「速射砲」のような日常生活からはかなり乖離した用語も含まれている。

3) 用例

用例は約 350 例文であり、場面に即した実用的な例文に限られている。

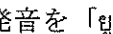
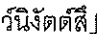
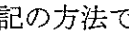
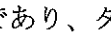
4) 文型

文型として置き換え、言い換えを練習すべきものが 40 ほど、取り上げられている。こちらでも詳細は別添資料をご覧ください。

5) 文法項目

本書の 48 頁に「物の数え方」があるが、この助数詞（数量詞）は、日本人がタイ語を話す場合になくしては不便であるということで入れられたのではないと思われる。また、「形容詞」がそのまま一つの項目として取り上げられているのもその実用性を感じさせる。

6) 発音

戦後、鈴木はタイ語母語話者の発音に関する問題点やその指導について述べているが、恐らくはバンコク滞在中、日頃の経験の中で問題点を整理していったものと思われる。タイ語母語話者の日本語の発音について、千葉・佐藤（2005）は次のような点をあげている。すなわち、「し」と「ち」及び「つ」と「す」の区別が困難である。[z]・[s]及び[g]・[k]の混同。撥音が短くなる、促音の有無を混同する、短母音と長母音を混同する等である。これらの研究結果は 1960 年代の鈴木の研究結果とほぼ変わらないものであり、鈴木の観察は正鵠を得ていたものと言える。また、ここで注目すべきは、タイ文字による日本語の発音の表記の仕方である。一例をあげると「夏」の発音を「」（通常の表記は「」）、「一月」の発音を「」（通常の表記は「」）、十二月の発音を「」（通常の表記は「」）のように記している。これは恐らく鈴木独特の表記の方法であり、タイ語母語話者に日本語の特殊音を理解してもらうのうらいたいと考えたものではないかと思われる⁽¹¹⁾。

7) 文字表記

日本語の表記に関しては漢字かたかな混じり文、歴史的かな使いで書かれている。例えば、

「デハ、又明日才會ヒ致シマセウ。」と日本語で表記されていて、それに対するタイ文字による発音の表記は「เดะหะมะตะเมื่อยาหนีจ๊ะโอะอิดะชิมะไซ (Dewa mata myounichi oaishimasho)」となっている。これはタイ人の日本語学習者に漢字かたかな混じり文や歴史的な仮名遣いを教授するためというよりは、こうした表記に慣れ親しんでいる日本人の側を考慮しての処置であろう。

4. おわりに

約 70 年前のタイ、バンコクを考える時、戦争の時代であり、現在とはまったく異なる感覚で人々は生きていたことを念頭に置かなければならないと思う。

1941 年から 45 年まで、鈴木はバンコクでタイ人の学生たちを相手に日本語教師として活躍をした。まったく同時代にフィリピン、香港、インドネシア、シンガポール、マレー等の東南アジアの戦地での日本語教育があった。軍政下の日本語教育とタイのそれは建前上は異なっていたかもしれないが、事実上日本がタイを傀儡政権化した中での日本語教育であった。生前、鈴木は不思議なくらいタイについて書き残すことをしなかった。鈴木 の地位は現在ならば国際交流基金より派遣される日本語の専門家のような地位で、恐らく当時の状況からは鈴木 の意に沿わないことも、国策としてやらなくてはならないことも多かったのではないだろうか。しかし、鈴木先生といえは「タイとお酒」と言われるくらい、その青春を送ったタイ国への思い入れは強かったようである。

謝辞

本稿は 2009 年 3 月に行われました「タイ国日本語教育研究会第 21 年次セミナー、ポスター発表」をもとに作成したものです。発表の機会を賜りましたタイ国日本語教育研究会並びに当日様々なご意見をお寄せくださいました皆様に感謝致します。

また、本稿の作成にあたりましては、東京外国語大学の河路由佳先生にご教示を賜りました。また、貴重な資料のご提供を賜りました。そして、瀬戸正夫先生には戦前、戦後の数々のご体験をお聞きかせ頂きました。ここに記してあつく御礼申し上げます。

【別添資料】『簡易日泰会話』の内容と語彙、用例数及び文型一覧

(語彙編)	語彙用例数
数 (p.1~3)	57 語彙
序数 (p.3~4)	10 語彙
度数 (p.4~5)	15 語彙
分数 (p.5)	5 語彙
倍数 (p.5)	14 語彙
日付 (p.6~7)	24 語彙
月 (p.7)	20 語彙
週 (p.8)	10 語彙
時 (p.8~10)	51 語彙
天文 (p.10~12)	37 語彙
地理 (p.12~13)	40 語彙
人事 (p.14~16)	53 語彙
身体 (p.16~18)	55 語彙
病氣 (p.18~20)	54 語彙
飲食 (p.21~23)	59 語彙
穀物 野菜 果物 (p.23~25)	59 語彙
日常用品 (p.26~30)	94 語彙
商工 (p.30~32)	46 語彙
学校 (p.32~33)	31 語彙
官衛 (p.33~34)	27 語彙
官位 (p.34~35)	39 語彙
軍 (p.36~39)	66 語彙
色 (p.39)	17 語彙
動物 (p.40~42)	71 語彙
乗物 (p.43~44)	35 語彙
形容詞 (p.44~47)	83 語彙
物の数え方 (p.48)	23 語彙
会話 1: ヨク使フ言葉 (p.49~53)	58 用例
会話 2: 挨拶 (p.54~55)	23 用例
会話 3: 電話ヲ掛ケル時 (p.3~4)	21 用例
会話 4: 市中見物 (p.58~60)	21 用例
会話 5: 道ヲ尋ネル時 (p.61~62)	15 用例
会話 6: サムローニ乗ル時 (P.63~64)	19 用例
会話 7: 電車、バスニ乗ル時 (p.65~66)	17 用例
会話 8: 飲食店ニテ	19 用例
会話 9: 旅館 (p.69~70)	16 用例
会話 10: 郵便局ニテ (p.71~72)	16 用例
会話 11: 買物 (p.73~74)	22 用例
会話 12: 文房具店ニテ (p.75~76)	7 用例、24 語彙
会話 13: 帽子店ニテ (p.77~79)	26 用例、12 語彙
会話 14: 靴屋ニテ (p.80~81)	13 用例、10 語彙
会話 15: 書店ニテ (p.82~83)	10 用例、14 語彙
会話 16: 洋品店ニテ (p.84~85)	10 用例、24 語彙
会話 17: 薬品店ニテ (p.86~87)	10 用例、20 語彙
会話 18: 洋服屋ニテ (p.88~89)	17 用例、12 語彙
会話 19: 時計屋ニテ (p.90~91)	18 用例、8 語彙
会話 21: 病院ニテ (p.92~93)	22 用例
会話 22: 映画館ニテ (p.94~95)	20 用例
○文化機関、公会等 (p.96)	22 語彙
○著名ノ場所 (p.97)	22 語彙
○著名ノ道路 (p.98)	44 語彙
○市内ノ有名ノ寺院 (p.99)	44 語彙
○著名ノ橋ト運河 (p.100)	42 語彙

『簡易日泰会話』文型一覧

○ヨク使フ言葉 (p.49～53) ①～ハアリマスカ。②～サンハイマスカ。③～サンハイマセン。④～ヲ (一ツ) クダサイ。⑤～ヲ見セテクダサイ。⑥アナタハ～ヲ知ッテイマスカ。⑦私ハ～ヘ行キマス。⑧私ハ～ヲ持ッテキマス。⑨アナタハ～ヲ持ッテキマスカ。⑩～ハ遠イデスカ (近イデスカ)。
○電話ヲ掛ケル時 (p.3～4) ①～の家デ御座イマス。②モシモシ、～サンノオ宅デスカ。③～サンハイラッシャイマ④スリオン路ノ～サンノオ宅ハナンバンデスカ。⑤～ヘ長距離電話ヲ願イマス。⑥～マデ何分位カカリマスカ。
○市中見物 (p.58～60) ①コレハ～トイウ所デスカ。②～マデ連レテ行ッテ下サイマセンカ。
○道ヲ尋ネル時 (p.61～64) ①～ヘ行ク道ハコノ道デヨイデセウカ。②～ヘ行ク道ハドチラデ御座イマスカ。③コノ辺に～トイウ日本人ノ商店ガアリマスカ。④～ヘ行ク道ホコレデハアリマセンカ。
○サムローニ乗ル時 (P.63～64) ①～マデ幾ラデイキマスカ。②～マデ四拾サタンデ行キマス。③～トイフ日本ノ商店ヲ知ッテキマスカ。④～ノ近所デス。⑤～マデ往復デイクラデスカ。
○電車、バスニ乗ル時 (p.65～66) ①此電車ハ～ノ前ヲ通りマスカ。②～マデ幾ラデスカ。③～ハマダデスカ。④～ヘ行クニハ乗り換エガアリマスカ。⑤～ヘ行クニハ何デ行ッたら便利デスカ。⑥～ヘハ電車モバスモアリマセン。⑦～ヘ行クバスハドレデスカ。
○飲食店ニテ (P. 67～68) ①～ハ出来マスカ。②～ハイリマセン。
○時計屋ニテ (p.90～91) ①～日ニ取りニ来マス。②～日マデニ必ズ御願イシマス。

注

- (1) 河路由佳 (2006)
- (2) 小堀郁夫 (2002) は、直接法に言及すると同時に次のように鈴木業績を顕彰している。

「ここで忘れてはならないのは、特に戦後の日本語教育界で指導的役割を果たした学者の一人に鈴木忍 (1914～79) がいる。鈴木は (財) 国際学友会日本語学校校長、東京外国語大学付属日本語学校 (現留学生教育センター) 教授を歴任し、留学生のための日本語学習書を数多く開発し、主にアジア諸国からの留学生に対する教育を行った。その鈴木指導法を国際学友会の「学友会」をとって「学友会方式」とも呼び、直接法を指導原理としながらも教育効果を上げ得る有効な方法は、すべて利用するという立場をとった。」
- (3) 泉虎一『日暹會話便覧』に関しては、伊藤孝行 (2008) に詳しい。
- (4) ウォラウト・チラソンバット (2008)
- (5) 河路由佳 (2006)
- (6) 上甲幹一によれば、日本語教育教材の紹介の欄に「国際学友会 日本語読本 五巻 31 (同会) B5 160-250 ページ[昭 18 に出た同会の「日本語教科書」(五巻)の改訂版。巻五は近刊。最初歩から文語入門に至る高級用教科書] (『日本語教授と日本語学習の参考書一覧』『言語生活』11 号 p 48-51) とあり、昭和 30 年前後、関係者の間では鈴木の本は戦前に国際学友会が作成した『日本語教科書』(5 巻)の改訂版という認識でいたようである。
- (7) ไวยากรณ์ภาษาญี่ปุ่นเบื้องต้นผู้ช่วยศาสตราจารย์สุเทพนอมสวัสดิ์ภาควิชาภาษาญี่ปุ่น คณะศิลปศาสตร์ มหาวิทยาลัยธรรมศาสตร์ (1987)
- (8) 1978 年鈴木は「インドネシア・シンガポール・タイ・香港における日本語教育事情の調査と巡回指導」のためタイに立ち寄った。報告書の中の「日本語教育のテキストについて」では次のように述べられており、鈴木を思いを代弁しているように思われる。

「あるテキストがある機関に向かないということはもっともなことである。テキストというものは、その性質上、あらゆる環境に向く唯一無二といったものはありえないからである。最もよいものは、それぞれの環境に適した独自のものを編集して使用することである。(中略) この段階では現地からいろいろ意見を聞き、最大公約数的なテキストを編集して、それを提供しなければならないだろう。(中略) 日本語の特徴をもりこんだメイン・テキストをまず編集し、それに準拠した補助教材として視聴覚教具、それに、教師用指導書と学習者用自習書を母語別に作り、それぞれの問題点をもりこんでおけば、理想に近いものができるのではないかと思う。もちろん、このような教材の作成には、現地の教員の協力を仰がなければならない。(『インドネシア・シンガポール・タイ・香港における日本語教育事情の調査と巡回指導』についての報告 (昭和 53 年 5 月 6 日) 鈴木忍、玉村文郎、大坪一夫より)

- (9) 瀬戸正夫 (2008) 「タイに進駐した日本軍」 P 225～P 244 に詳しい。
- (10) 川瀬生郎 (1978)
- (11) 国際交流基金バンコク日本文化センターの松原潤先生にご教示を賜りました。

参考文献

- 伊藤孝行 (2008) 「タイ人向け日本語教科書管見—泉虎一『日暹會話便覧』・国際文化振興會 NIPPONGO のことば—」 2008 年 3 月 タイ国日本語教育研究会 20 周年記念セミナー 配布資料
- ウォラウト・チラソンバット (2008) 「タイにおける日本語教育と研究会の 20 年」『タイ国日本語教育研究会 20 周年記念セミナー』タイ国日本語教育研究会 p.23
- 河路由佳 (2006) 『非漢字圏留学生のための日本語学校の誕生—戦時体制下の国際学友会における日本語教育の展開—』有限会社港の人
- 川瀬生郎 (1978) 「鈴木忍先生と日本語教育」『日本語学校論集』第 5 号 東京外国語大学外国語学部附属日本語学校、pp.3-18
- 小堀郁夫 (2002) 「外国人留学生と日本語教育—私費留学生の場合—」『明海日本語』第 7 号
- 齋藤正雄 (2008) 「タイ国日本語教育小史」『国際交流基金バンコク日本文化センター 日本語教育紀要』第 5 号、pp.175-184
- 鈴木忍 (1963) 「発音の指導と問題点—タイ語国民を中心に—」『日本語教育』3 号 日本語教育学会、pp.7-20
- 鈴木忍 (1956) 「東南アジア学生の母語の日本語学習に及ぼす影響」『言語生活』11 号 国立国語研究所、pp.27-31
- 瀬戸正夫 (2008) 『旅の道すがら』(自費出版)
- 田中寛 (2002) 『対照言語学的手法・視点にもとづく、日本語とタイ語の基本語彙・語法に関する比較研究』平成 10 年度～平成 12 年度 文部科学省科学研究費補助金 基盤研究 (C) (2) 研究成果報告書
- 千葉真人・佐藤純 (2005) 「これでいいのかなあ? 発音指導—学習者が感じている問題点とその解決法を探る—」タイ国日本語教育研究会第 147 回月例会 発表資料